国技を支えるこの情熱を見よ

アマ翔る！

立教大学相撲部 総監督
サンテプラス株式会社 代表
坂田直明さん

第200回

「太った人がするもの」「健康に悪い」「上下関係が厳しい」「古い」——相撲へのそんな負のイメージを払拭しようと行動している人がいる。自身の大学相撲部時代の経験から、相撲の無限の可能性を知り、広げようとする姿には、相撲の未来を拓くヒントがある。（十枝慶二）

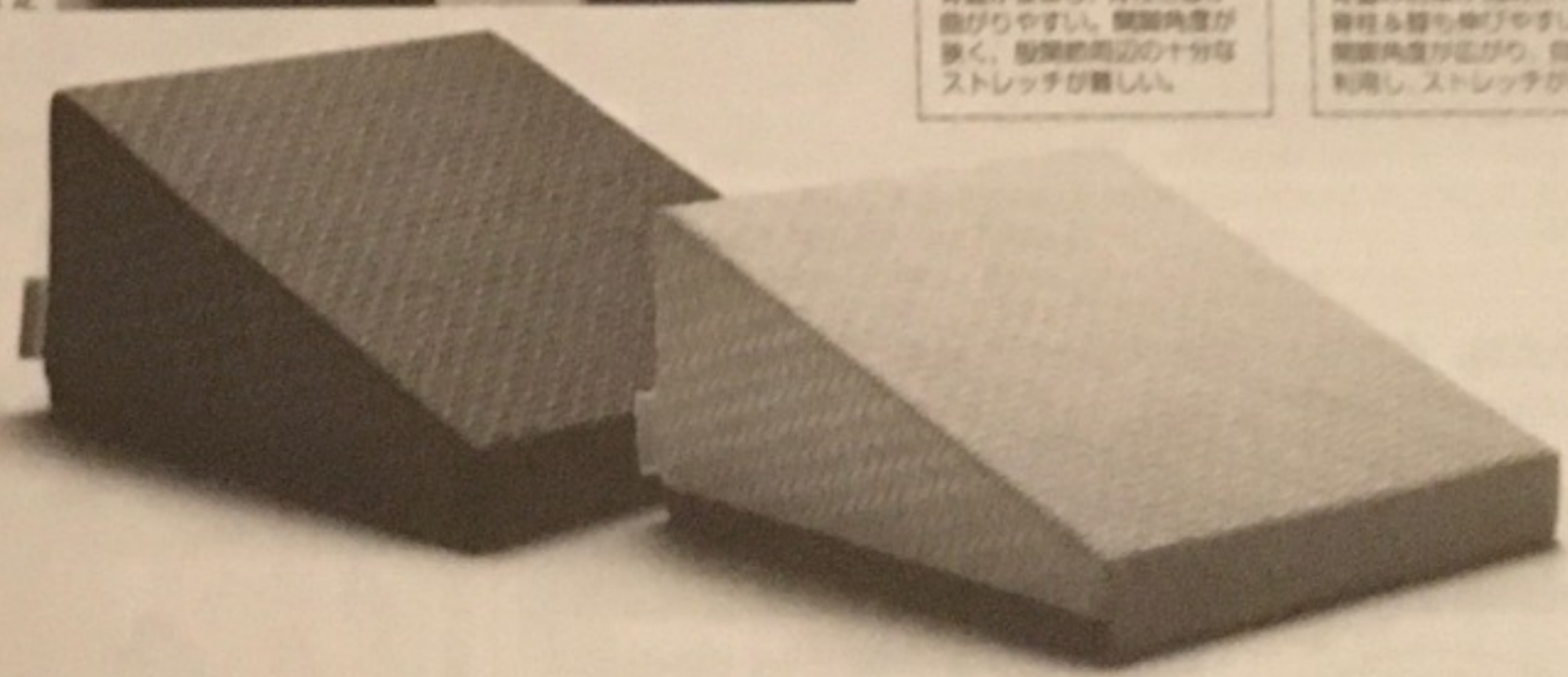
相撲から生まれた大ヒット商品

スポーツジムのストレッチスペースで、右下の写真のような表面が斜めになったクッションを目にしたことはないだろうか。この「フレックスクッション」は、お尻を乗せるだけで骨盤が前傾しやすくなり、体が硬い人も無理せず効果的にストレッチができる優れものだ。多くのスポーツジムで定番品となり、プロ野球全12球団、アメリカ大リーグ4球団、日欧のプロサッカー25チームなどでも採用され、トップ選手に愛用されている。

この大ヒット商品は相撲から生まれたものだ。開発者はサンテプラス株式会社代表取締役の坂田直明さん（49歳）。立教大学相撲部OBで現在は相撲部総監督を務めている。開発のヒントは相撲部時代の経験にあった。

○相撲の「股割り」をヒントに生まれたストレッチの定番品「フレックスクッション」と、開発者でサンテプラス株式会社代表の坂田直明さん

相撲の「股割り」をヒントに開発



「私は体が硬くて股割りが苦手だったんですが、土俵の俵の上にお尻を乗せると、骨盤が立って効果的にストレッチができると気づきました。それをヒントに開発したのです」

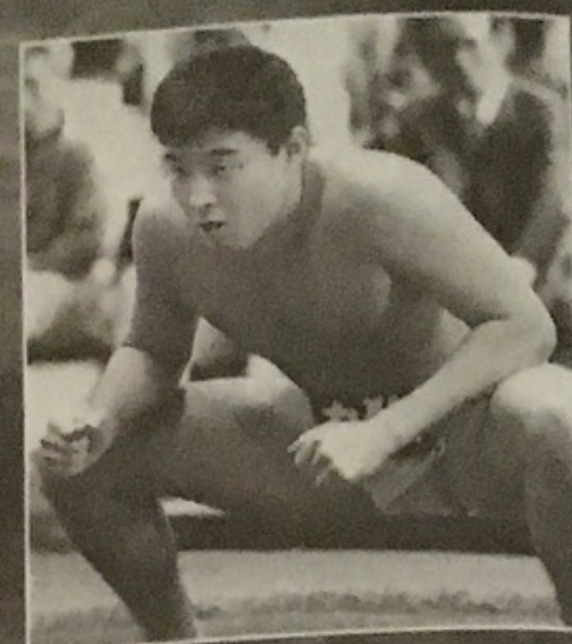
坂田さんは昭和46年生まれで東京都新宿区出身。子供の頃から相撲は大好きで、小学校の砂場で休み時間に相撲を取っていたが、相撲道場の存在は知らず、廻しを締めて土俵に上がることはなかった。

立教高校ではアメリカンフットボール部で活躍。立教大学入学時に相撲部の存在を知ったが入部は考えなかった。「相撲は太った人がするもの」と思っていたからだ。しかし、大学2年の時、友人が相撲部のマネージャーを好きになったのをきっかけに相撲部に足を運び、初めて廻しを締めて相撲を取り、その面白さを知って入部した。

立教大学相撲部は当時、柔道部員ら助っ人で大会に出ることで存続する状況で、坂田さんは船山陽司さん（現アナウンサー）らと共に12年ぶりの正部員となった。思い出は、静岡県の大仁神社で行われた慶応大学との合同合宿。相撲教習所の名教官としても知られた春日

アメリカの運動指導員に相撲エクササイズを教える坂田さん（中央奥）

パナソニックのロシア駐在員時代、マリインスキー劇場の前で



立教大学相撲部時代の坂田さん

野部屋の元幕内鳴門海の竹縄親方から、四股やスリ足など、相撲の基礎を教わった。3年時には、立教大学相撲部をモデルにした周防正行監督、本木雅弘さん主演の映画『シコふんじゃった。』が公開され、マスコミなどに取材され、部員数も少しずつ増えた。

忘れられないのは堀口圭一監督の存在だ。在学中は学生横綱、卒業後はダイニッカでアマ横綱に輝いたレジェンドだが、偉ぶらず、温かく包み込む人柄に引かれ、OBら多くの関係者が集う。また坂田さんが3年生の時から監督を務めた肥田隆雄さんも父親のような存在だ。そんな立教大学相撲部は坂田さんにとって居心地よい故郷のような場所になった。

バレエやラグビーに通じる相撲の基礎

平成7年に大学卒業後は松下電器産業（現パナソニック株式会社）に入社。6年後に退社してフランスの大学院でMBAを取得した後、帰国してミシュランタイヤに入社。仕事は充実していたが、平成16年3月、退社して起業を決意する。分野は「相撲エクササイズ」。それまでの業務とは縁のない未知の仕事だ。当然、周囲は猛反対。しかし決意は揺るがなかった。胸の内には、社会人時代にさまざまなきっかけで培われた、相撲への熱い思いがあった。

一つ目のきっかけは、松下電器のロシア駐在員時代。本場のバレエ鑑賞にはまったこと。「バレエの基礎が相撲とよく似ているんです。股割りは必須ですし、『ドゥミプリエ』という動きは腰割りにそっくり」

二つ目は、フランスの大学院時代に経験したラグビーだ。「左右にステップを踏む動きが、アメフトをやっていた高校時代よりはるかに楽にできる。大学の相撲部で四股を踏んだおかげだと直感しました」

三つ目は、フランスからの帰国後、平成15年から立教大学相撲部でコーチになったこと。後輩に四股やテッポウを指導し、その素晴らしさを再認識した。

四つ目は、坂田さん自身がジムでトレーニングをしたこと。日本のジムなのにエクササイズはアメリカ発のものばかり。「日本人なのになぜ四股を踏まないんだろう？」「バレエやラグビーに役立つのだから日本だけでなく世界にも通じる」――そんな思いから「相撲の四股・テッポウ・スリ足・股割りをフィットネスエクササイズとして世界のスポーツジムに広げたい」という志が育まれ、起業した。

前述の堀口氏、肥田氏の協力や国際相撲連盟の推奨を得て、フィットネス風の「スモウ・コア・エクササイズ」を開発。早速本場アメリカに渡って披露した。そこでエクササイズ以上に評判となったのが、付属品として提案したフレックスクッション。チームやジムなどで採用されると、実際に使った選手や一般ユーザーが、「これは便利だ」「ぜひ欲しい」と次々に買い求める。そんな現象がアメリカ、日本などで競技の垣根を越えて起き、爆発的なヒット商品となった。

相撲の未来のため体重制限を

こうして相撲発のビジネスを成功させる一方で、坂田さんは競技人口が低迷する相撲の現状にもどかしさを募らせてきた。

立教大学のように高校の相撲経験者の推薦入学のシステムが整わない大学の相撲部は新入部員勧誘が必須だ。しかしどこも難航する。原因は「太りたくない」「上下関係が厳しそう」など相撲への負のイメージだ。坂田さん自身大学入学時にそうだったから気持ちはわかる。しかし、自らが相撲を取り、面白さに目覚めた経験から、負のイメージが誤解だとも知っている。

平成29年から立教大学相撲部監督に就任すると（今年からは総監督）、広報活動を強化し、相撲の魅力を内外に発信。『シコふんじゃった。』の周防監督を相撲部総監督に招き、女性マネージャーを主将に抜擢。伝統に縛られない斬新な発想を取り入れた。

他の運動部からの助っ人も、競技を活性化し本人の能力も広げる機会ととらえ積極的に推進。平成30年の東日本学生

●立教大学相撲部を主テーマとした座談会シンポジウムの開催を主導した坂田さん（左）から発起人に、神戸勇さんのプロデューサー（右）が今年度就任

●来年2月の第8回日本学生相撲リーグ戦で、6戦全勝の成績を収めて優勝を飾ったこの大会は立教大学を含む8チームの参加で行われた

体重別で柔道部の長谷川壱星選手が135キロ未満級3位に入賞した。

しかし、競技人口の低迷は一つの大学相撲部で解決できる問題ではない。日本相撲連盟が把握する競技登録者数は約5700人。インターハイの予選も各都道府県1～3校で代表の座を争うのが現状で、ゼロというところもある。そこで坂田さんは、「相撲発展のための私案」を、『月刊武道』（日本武道館発行、ベースボール・マガジン社発売）今年2月号に寄稿した。

日本相撲協会（大相撲）と日本相撲連盟（アマ相撲）の合併による競技人口の増加のための活動と財源確保、大相撲の力士とアマ相撲の選手が同じ土俵に上がる大会の開催など画期的なアイデアの数々のなかで最も目を引くのが「体重制限」だ。「食べるのも稽古のうち」と言われ、体重が増えれば強くなることは多くの相撲経験者が体感している。それを否定する「体重制限」の発想は、相撲関係者にとっては突飛で、現実味が薄く思える。

しかし、坂田さんはあえてそこに踏み込むべきだと考える。165キロ制限から始め、2年5キロずつ減らして18年後には120キロにするという具体的なステップも考えている。

主張の裏にあるのは、将来的に相撲が「カッコいいもの」「健康によいもの」「親が子供にやらせたくなるもの」になるべきという明確なビジョンだ。

「年々増える一方の体重や不健康なイメージは、相撲を取る人を増やすための最大の障壁です。これを変えるには体重制限すべきです。引き締まった筋肉質な体の選手が増えれば、あこがれる子供が増え、親もやらせようと思う。より技を競い、相撲が面白くなる。引退後の就職を考えてもメリットは大きいと考えます」

明確なビジョンを描くことが大切

坂田さんはこの体重制限を、アマ相撲だけでなく大相撲にも導入すべきだと考えている。大相撲の力士が、「自分もなりたい」とあこがれるかっこいい存在になってこそ、相撲の競技人口が増えると考えるからだ。

本誌の読者には、この考えには抵抗を覚える人が多いかもしれない。特に大相撲では、並外れて大きな体格自体が、大きな魅力でもあるからだ。

筆者自身、正直に言えば体重制限をすんなりとは受け入れられない。しかし、そこに相撲の未来を拓く可能性があるとも思う。それは、千代の富士フィーバーを目の当たりした経験があるからだ。子供の頃ずっと、筆者のような相撲ファンは少数派だった。しかし、中2の冬、千代の富士が登場すると、がらりと変わった。毎朝、教室のあちこちで相撲が話題になり、千代の富士のかっこよさが語られ、休み時間にはみんなが相撲を取った。相撲は一夜にして「メジャーなスポーツ」になったのだ。まさしく「革命」だった。それを、特別なヒーローの出現を待つのではなく、明確なビジョンのもとに戦略的につくりだすことはできるのではないか。

「相撲は太った人のもの」というイメージは、海外にも浸透している。坂田さんにはそれを実感する機会があった。

「事業を立ち上げてアメリカに渡ったとき、フレックスクッションが受け入れられた一方、相撲エクササイズは『太るイメージがあるから導入しない』と断られました。イメージさえ変われば相撲エクササイズも世界に広まると私は思っています」

体重制限以外の道でも、競技人口を増やすことできるかもしれない。だとしたら、そこにはどんなビジョンがあるのか。必要なのは、考え得る未来の相撲のビジョンをいくつか考え、どの道を選ぶべきか、相撲にかかわる多くの人が、プロとアマの垣根を越えて話し合うことではないか。もしも、2つの違うビジョンが支持されたら、別々の道を歩んでもいいかもしれない。

何もビジョンを描かず、現状を受け入れたまま無為な日々を過ごしたら、相撲はいつか衰退するのではないか。そんな道は歩んでほしくないと私は思う。

照ノ富士、独走ムード一転も決定戦制し4回目の優勝

相撲

夏場所
総決算号 6
No.922 2021
ベースボール・マガジン社

技能賞・若隆景、遠藤
宇良、十両優勝し幕内復帰

全15日間熱戦グラフ
幕内全力士自己採点

照ノ富士、4回目の優勝 来場所は綱取りに挑戦